

自然環境における幼児の探索活動と造形表現に関する研究

—大人の子どもの学びの契機としての幼稚園と大学の連携—

Children's Exploration and Art Work in Nature in Collaboration between Kindergarten
and University

秋山麻実 芹澤 如比古 新野 貴 則
Asami AKIYAMA Yukihiro SERISAWA Takanori NIINO
萩原 ひろみ 野 田 多佳子
Hiromi OGIHARA Takako NODA

自然環境における幼児の探索活動と造形表現に関する研究

—大人の子どもの学びの契機としての幼稚園と大学の連携—

Children's Exploration and Art Work in Nature in Collaboration between Kindergarten and University

秋山麻実 芹澤 如比古 新野 貴則
Asami AKIYAMA Yukihiko SERISAWA Takanori NIINO

荻原 ひろみ* 野田 多佳子*
Hiromi OGIHARA Takako NODA

1. はじめに

本研究は、幼稚園保育への外部の知の導入と、子どもたちや保護者、保育者の学びの関連について実践的に研究するものである。環境生物学、美術科教育学および幼児教育学の研究者が、幼稚園で行う自然体験保育に参加することで、保育にどのような意義を持つのかを保育実践とその振り返りを通して明らかにする。

自然との関わりについて、平成29年度幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」において、「自然との関わり・生命尊重」が挙げられ、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、いのちあるものとしていたわり、大切にす気持ちをもって関わるようになる」とされている。また従来の5領域の「環境」においては、そのねらいは「(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2)身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」とされている。

また表現については、従来の5領域における表現のなかでそのねらいとして「(1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」ことが挙げられているのに加えて、「育ってほしい姿」においても、「豊かな感性と表現」として「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」と記されている。

これらの文言は、幼稚園保育において子どもたちの活動が、周囲の環境への興味・関心をベースにしながら触れ、知り、考え、その中で生きるような育ちを保障するものであること、子どもたちが感じたこと、考えたことを表現したり、創造したりすることを促すものであることを示している。しかし、自然に触れる保育は、特別にそれに焦点化した「森のようちえん」や信州の「やまほいく」のような取り組みのなかでは十分に行われているけれども、普通の保育に取り入れることが十分に広まっているとはいえない。また、そうした経験が、子どもたちの思考や感情およびその表現とどのように関わるのかということについての研究は非常に少ない。そのなかで、たとえば茶谷は自然保育におけ

* 山梨大学教育学部附属幼稚園

る幼児理解の可能性について研究しているが、そのなかで楽しさや嬉しさに着目した評価をしてしまうと、幼児理解を浅くとどめてしまうという重要な指摘をしている¹。この研究は、自然保育の意義を幼児理解の機会という観点から考察しているという点では興味深いが、保育者による、担当クラスの子どもたちの具体的な育ちをみながら自然環境のなかで保育を行うことの意味や評価を含む保育実践研究とはなっていない。

一方保育実践研究では、保育のねらいが、保育者のどのような願いや理念に基づくのか、どのような子どもたちの姿を踏まえて立てられるのか、子どもたちにとって結果的にはどのようなことが起こったのか、大人も子どもも含めて、何を学んだのかといった要素についての記述的な研究によって、保育実践の意味を確認・検証することができる。本研究では、具体的な保育実践研究山梨大学教育学部附属幼稚園の1クラスを対象に、子どもたちの育ちの様子、クラスの課題、保育のねらいを参加者で共有し、そのうえで大学の知を、幼児と大人の学びの権利保障のなかに位置づける試みとして、大学研と幼稚園保育との連携を行った。実践の評価として、具体的な子どもの姿、保護者の姿と、参加した研究者の役割、保育者にとって保育以外のさまざまな専門的知識に触れることの意味について考察した。

2. 概要

保育の取り組みの概要は、以下の通りである。

- 2017年9月8日、山梨大学教育学部美術科教育学教員へ同学部附属幼稚園教諭より保育参加協力依頼
- 9月11日、山梨大学教育学部美術科教育学教員へ同学部附属幼稚園教諭より実態報告。
- 9月13日、山梨大学教育学部美術科教育学教員と同学部附属幼稚園教諭とで、電話で打ち合わせ。
- 2017年10月11日、山梨大学の教育学部教員3名と、同学部附属幼稚園スタッフ2名で打ち合わせを行う。山梨県林務課の協力を得て、教育林を利用させてもらうこと、年中児保護者の保育参加と共にすることが決定される。
- 雨天にそなえて、自然物での工作の準備。
- 11月9日 林務課スタッフ2名が年中児に事前説明。
- 11月9日 林務課スタッフ2名と幼稚園スタッフ2名、大学教員3名で下見。
- 11月15日 年中1クラスの幼児と保護者（幼児32名、保護者34名）、林務課スタッフ2名、幼稚園スタッフ4名、学部教員3名で、教育林にて遠足を行った。

3. 経緯

本実践は当初、幼稚園における保育参観を、美術科教育学教員（新野）の協力を得て行うというアイデアから企画された。そのさい主眼となったのは、「表現の上手・下手ということを気にせず、伸び伸びと自由に表現することを楽しめるような活動をしたい」という保育者の思いだった。これは、以下のような現状把握に基づいていた。

<園児の実態>

- ・絵画や制作が好きで自分から進んで取り組んでいる子がいる
- ・絵画や制作などに集中できない子もいる
- ・上手にできないことが不安で、取り組めない子もいる

<保護者の実態>

- ・他人と比べたり、上手に描くことや創ることを求めたりしている方が多い（年中クラス担任：野田）

以上の点については、9月11日の美術科教育学教員と附属幼稚園教諭の打ち合わせ、および10月11

日の環境生態学教員、幼児教育学教員も交えた打ち合わせにおいても共有された。このなかで着目すべき点は、「上手く」できるかどうかということ、子どもも保護者も気にかけているということである。学校や園には、運動や芸術など、上手にできるかできないかが都度明らかになりやすい活動がある。成績評価がなされない就学前段階でも、大人も子どもも出来栄を意識するケースが多い。他者と比べる視点とともに、自身の思った通りに身体をコントロールし、物を上手く扱うことができないことも、子どもにとっては不安や断念の要因となる。

これに対して保育者は、「一人一人の個性を生かした「その子なり」の表現がどれも素敵なので、表現したくなる気持ちや表現していく過程の楽しさを感じて欲しい」と考えていた。子どもや保護者の思いが、絵画や制作の結果へと向かうのに対して、保育者の願いは「表現」へのモチベーションや楽しさに焦点を当てている。しかし、人間が創作活動をするときには、過程の楽しさもさることながら、結果への満足も求めてしまうのではないか。そうしたズレをどのように保育のなかで捉え、変えていくのが課題として浮かんで来ていた。

9月13日の美術科教育学教員と附属幼稚園教諭との打ち合わせの段階までは、自然物を使った造形活動を行うという予定を立てていた。保育参加を行う年中児クラスの子どもたちは、元々木の実などが好きで拾ってきていたので、それらを使った造形活動に興味があるのではないかと考えられた。

またここで重視すべき課題の一つとしてあげられたのが、幼児の造形表現活動への保護者の理解を促すことであった。このことについて、美術科教育学教員新野の判断は以下のようであった。

この背景には、幼児の造形表現活動が幼児なりに主体的に意味や価値を発見、発明していく過程であるとの理解が必ずしも十分ではないという判断があった。つまり、幼児の造形表現に対する誤解があるという判断である。

保護者の誤解とは、幼児が表現した物を作品としてとらえ、「上手であるかどうか」「そっくりであるかどうか」「丁寧に描けているかどうか」などの基準でその価値を判断してしまうことである²。このとき、幼児の造形表現活動は、その活動そのものとはまったく異なる視点（大人の造形表現への思い込み）から評価してしまい、幼児自身の学びを覆い隠してしまうことになる。ひいては、「上手な作品」をつくらせようとしてしまい、幼児の造形表現活動を通した学びを阻害してしまう恐れもある（新野）。

幼稚園保育が子どもの今を読み取り、どもの育ちを促すような次の遊びや活動を展開させていくものだとしても、それは「子どもと保育者が共に織りなしてつくりあげるものであって、保育者が勝手に構想するものではない」³。むしろ保育中の活動が子どもたち自身の考えや、支え合う仲間や大人たちとの関係に委ねられることが、子どもの育ちを促すことについて、レヅジョ・エミリア保育の中核であったマラグッチは次のように表現する。「思考、理性、言葉は、そして感情も、行動や比較をすることによって初めて生きています。子どもを突き動かすのは内部の力ですが、事実や思想が資源であると同様に、周りの仲間や大人たちもかけがえなく大切な資源だと子どもたちが納得すると、その力は何倍にも増大します」⁴。しかし、実際に子どもの育ちがそうして組織されるためには、保育者の成熟と保護者の納得や同意が不可欠であり、その意味で保育者と保護者は子どもの育ちを支える仲間である必要がある。子どもの活動や作品に対する保護者の関心のあり方への働きかけは、そうした文脈に沿って必要とされるものだったといえる。

打ち合わせにおいて確認された活動の意図と予想される筋道は、以下のものとなった。

そこで、活動実践に際して木切れや枯葉、木の実、石ころなどの自然物を材料として用いることを考えた。自然物を用いることで上手／下手はあられ難いため、保護者の意識が「作品」ではなく、幼児の活動そのものに向かう可能性が増すのではないかと考えたからである。自然物を用いた幼児の表現活動では、それらを組み合わせることや見立てることによって表現することが考えられるが、その行為そのものに上手／下手の判断を下すことはそもそも困難である。活動から見出すことができるのは、幼児が自然物から何らかの価値を発見することや想像力を膨らませる場面である。そうであるならば、このことが、幼児の学びについて保護者に気付いてもらうきっかけになるはずである。

さらには、自然物を材料として用いることで、幼児だけでなく、保護者も活動を通して意味や価値を発見する可能性も増すと考えた。自然物を材料として捉えようとすることによって、その形や色に焦点があてられることになるからである。例えば、小枝であれば、日常の中では「木の枝」もしくは「ゴミとして処理すべきもの」という程度の意味にしかならない。しかし、そこに造形のための材料として意味を与えることによって、その形に面白さを感じたり表皮の触った感じや色の多様さなどに気付いたりすることができる。自然の造形が非常に複雑であることも、新たな意味や価値を発見する手助けになる。

これらの考えは、保護者のいわば常識的な考え方を取り除くために、言い換えれば、対象をとらえる視点を幼児と同じようにすることを意図しており、その意図を実現するためには自然物を利用することは有効であると考えた。（新野）

山梨県林務課の管理する教育林は、幼稚園から車で5分程度の場所にある。自然物を使った保育をするのであれば、自分で採取してきた物を使うというのも良いアイデアのように思われた。用意された素材を制作するよりも、自分で採って来たものを自分の物にし、じっくり観察したり触ったりしながら向き合い、手を加えていくというときに生じてくる子どもの目線も、保護者と共有する価値のあるものだからである。しかし、教育林に行くのであれば、植物や動物の環境に詳しい大人として、環境生物学の専門家が立ち会うのも面白いのではないかとアイデアが、幼児教育学教員（秋山）から出された。その結果、水生生物を中心に環境生物学を手掛ける教員（芹澤）が協力者として加わることになった。

一回の保育活動計画としては、多くの要素を盛り込み過ぎているため、内容の調整を10月11日の打ち合わせにおいて行った。子どもたちの中には、虫の好きな子どもや、保護者も含めてカブトムシなどの幼虫をとることに関心のある子どももいるため、今回の教育林の探検は、基本的に子どもたちの興味・関心を優先して、決まったルート上ではあるが好きなかたちで探索したり、宝物を見つけてくるということになった。芹澤は教育学を専門としているわけではないので、そういった人材が保育の中でどのように位置づけられるのかということが、打ち合わせのなかで問題となった。しかし全員が、環境や生物に関する「本物の」知識を持った人との出会いが、子どもたちに何をもたらすのかということに関心と期待があった。そのため、打ち合わせが終わる頃には「はかせ」として登場してもらおうというアイデアが、何か面白いことのきっかけになるような気がしていた。

この予感、11月9日に教育林に下見に行ったときから、確信に変わった。この日、林務課の職員2名は丁寧に説明をしながら森を案内してくれた。森は、甲府市を囲む低い山の一角の入り口にあり、アクセスが容易でありながら、教育林として利用可能な範囲を登っただけで、市内を一望できる。オオムラサキがきて産卵、幼虫、さなぎへと育つ場となるように、榎を植えていることや、子どもの木登り体験などを行う「こどもの森みどりの少年少女隊」といった活動をしていること、シカの足跡や糞なども見せてもらいながら、大人の足でまっすぐ登れば10分くらいのルートを、時間をかけて歩い

た。すぐにわかったことは、大人にとっても、あらゆるものが新鮮であること、多くの動植物について大人が無知だということだった。「はかせ」がいることで、動植物の名前を教えてもらうだけでなく、カテゴリーや再生産についてなど、疑問が増えていくことが実感された。

保育において、大人が楽しいと思うことは重要である。今ある知識や習慣に対して、異なるまなざしや異なる知識を得て、出会い直していくことは、学びの基盤である。「はかせ」と森に行くことは、何がどのように変わったとしても、きっと楽しい、と全員が考えた。

4. 「はかせ」がいるということ／林務課スタッフの意義

A児と「はかせ」とのエピソード

A児が自分でつかまえたクモを虫かごに入れ、はかせに見せる。

A児「これ、毒ですか？」

はかせ「毒?!」(はかせ、虫かごを手にとってよく見る)

はかせ「毒?」(はかせ、しばらくの間、虫かごの中のクモを見ている)

はかせ「コガネグモだったら……(クモを見ながら)別に毒じゃないけど……」

A児、振り返り母に「毒じゃないって」と小声で言う。

はかせ(しばらく見てから)「これ、巣、作ってた?」

A児「うん」

はかせ「巣、作ってたの、取ってきたの?」

A児「うん」

はかせ「おー」

はかせ(しばらくじっと見る)「噛まれたらちょっと痛いかもしれないけど、噛まれなければ別に……」

母「噛まれる?」

はかせ「こうやって持っていれば噛まれますよ、向こうも必死ですから。命がけですから」

はかせがA児に虫かごを戻すと、A児は虫かごの中のクモをじっと見ている。

はかせも、A児の手にある虫かごの中のクモをじっと見ている。

はかせ「ジョロウグモか、コガネグモじゃなくて……」

はかせは、A児の手にある虫かごの中のクモをずっと見ていた。

このエピソードについて、野田は、以下のようにコメントしている。

A児が「毒じゃないって」と小声で母親に伝えたとき、ほっとしたような様子だった。見たこともないクモを捕まえてうれしいA児の横で、母親は「毒があるかも」と不安があり、「毒があるか、ないか」ということが、親子の間で大きな問題となっていたのかもしれない。

親子関係のみの場合、親が子どもに教えるという立場になることが多い。時には、親が「毒かもしれない」という自分の思いや不安のみで、子どもに対して「逃しなさい」と言うことも考えられる。しかしそんな中、「はかせ」がいてくれることで、親も子どもと対等に話を聞き、教えてもらう立場になれる。ここでは、母親も、子どもと同じように、クモが噛むことを驚いている様子が見られた。「はかせ」がいることで母親も安心し、子どもと同じように初めて出会ったクモと向き合い、驚いたり喜んだりできたのかもしれないと感じた。

野田は、森に入る前に「はかせ」を、「生き物のことをなんでも知っている人」として紹介した。しかし「はかせ」である芹澤は、保育が始まる前には「聞きに来てくれたのにわからないということになるのは嫌だから、わからないことを質問されないといいな」と思っていたという。「なんでも知っている」などということは、理論的には不可能であることなど、大人なら誰でも知っている。しかし大人は、とりわけ保育や教育の場面では、子どもに対して「わからない」と言うことに抵抗を感じる。野田は、子どもたちが「これは何ですか」と質問攻めにするのではないかと予測していたという。しかしその予想に反して、子どもたちは物の名前を問うのではなく、その性質などについて質問をしていた。クモに毒があるかどうかというこのエピソードの質問も、そのひとつだった。

「毒」というのは、記号としてすでに恐ろしいものだし、保護者にとって子どもの安全は最も気がかりな情報である。保育者にとっても、保育中の安全は重要事項であり、子どもを中心に考えている限り、毒があるかどうかは大切な情報であり、毒があれば手放す必要があると判断する。名前をすでに知っている生き物に対して、「はかせ」がしげしげと眺めていたというこのエピソードは、子どもにとっても保護者にとっても、保育者や他の研究者にとっても新鮮なものだった。保育後の反省会では、探索や探究は、恐ろしいものへの関心によって始まる場合も多い。大人がものごとに関心を持っている姿を見ることは、知らないことに会うこと、探究することが許されるということ、子どもたちが目にする機会として意味づけることができるという意見が出た。

後日、芹澤はこのエピソードに応えるべく、クモの毒について調べた。以下はそれを文章化したものである。

クモの話（調べてみたらやはり毒が・・・）

園児のこのクモは何かとの問いかけに、「はかせ」はジョロウグモかコガネグモで、たぶんジョロウグモだろう、このクモは毒がないかも知れないが、クモ類の中には毒があるものもいるし、基本的に捕まえるときにはクモも必死に抵抗して噛むことがあるので注意するようにと伝えた。園児とその親はクモに噛まれることがあるということに驚いていた。何度も捕まえて、噛まれたこともあった経験上、毒がないだろうと伝えたが、文献調査の結果、ジョロウグモは節足動物における興奮性神経の伝達物質であるグルタミン酸を阻害する『JSTX-3 (Joro Spider Toxin)』という毒素を持っており、主にエサとなる昆虫などを麻痺させて捕食していることがわかった⁵。ネット検索では、一匹のクモが持っている毒は微量なので人が噛まれたとしてもほとんど影響はないとする解説が多かったが、一部、アナフィラキシーショックに注意を呼びかける記述もあったので、噛まれたら痛いだけでなく毒もあることを伝えるべきであったと「はかせ」は反省した。

芹澤にとって、子どもと一緒に森を歩いたことは、子どもに触発されてさまざまなことを考える契機でもあったという。実際に、上記のコメントのように、子どもの問いにもう一度真面目に向き合うことは、幼稚園教師にとっても刺激になることだった。附属幼稚園副園長荻原は反省会の折に、小さな発見を大人が真面目に受けとめてくれるという体験は貴重だったのではないかと発言した。そして、それが専門性に裏打ちされた向き合い方であり、保育者にはなかなかできないという感想を持った。以下が荻原のコメントである。

子どもにとって「はかせ」は自分のどんな質問にもきちんと向き合ってくれる存在。保護者（時に保育者）にとっては、当たり前のような事や一見的外れのように見えるような事にも「はかせ」が向き合っている姿から、そこに深い意味や知識がある事に気付かされる。家庭あるいは園

の中では、保護者や保育者は常に「教える側」にいないてはならないといった感覚をもってしまいがちだが、わからない事を目の前にすると子どもと大人は横並びの関係になる事に気付く事ができる。園生活、特に親子活動に場面に、大学教員や林務部スタッフのような専門家が関わってくれる事は、専門的な知識を提供してくれるだけでなく、子どもとの関係性にまで関わってくると考えられるのではないか。(荻原)

子どもたちの質問が、「これは何ですか」にとどまるものでなかったことは、先に触れた。野田はそこに、子どもたちがすでに知っているものと、今出会っているものとの関連を推測し、論理を構築するという出会い方をしている姿を見ている。そして、それを受けとめてくれる人的資源として「はかせ」を捉えている。

子どもたちは自分の発見した物を積極的にハカセのところに持って来て、質問をしていた。その中で気づいたのは、「これは何？」と聞くのではなく、「これってジョロウグモ?」「ハカセ、これは何かのたまごかなあ?」「これはカミキリムシの幼虫だよね!」と自分のもっている知識と自分が見つけたものをすりあわせて考えようとして聞いていた。(山梨大学教育学部幼小発達教育コース2年次生の感想より抜粋)

「はかせ」がいることで、子どもたちは、森で出会ったものに対して、「はかせに聞いてみたい」「はかせならわかるかもしれない」という期待をもつことができたのだろう。自分の考えや疑問に対してハカセがこたえてくれることで、子ども自身も安心して自分の考えを伝えることができたのだろう。(野田)

学ぶということが、現在の自分あるいは自分たちからの何らかの飛躍なのだと思えば、知識のある「専門家」は、系統立ててその知を伝達する役割にとどまるものではない。むしろ、自分たちの知を超えようとしたときに、きちんと見守り、応えてくれる人、超えたり飛躍したりすることができるということを感じさせてくれる人、あるいは飛躍して超えてみたい障壁となる人という意味合いがあるのではないか。この日、子どもたちは謎の半透明の小さな球状のものを植物の葉の上に見つけ、「はかせ」に聞いた。「はかせ」は虫こぶのようなものではないかと思ひ、「なんだろうな」といって指でつぶしてみたが、内容は液体だけであり、結局結論は出なかった。子どもたちにとっては、「はかせ」にもわからないものを自分たちが見つけてしまったということが嬉しく、誇らしい体験となった。

5. 造形活動へのつながり

後日、当初の予定であった造形活動を、自由な遊びのなかで少しずつ進めていった。以下はその経緯である。

美術科教育学の教員により、自然物を使った制作活動の意義を学び、意図的に自然物を使った活動を増やした。保護者の方に呼びかけ、休日に拾ったドングリや木の実を園に持って来ていただいたり、11月1日(水)に遠足に出かけ、公園でドングリを拾ってきたりして、自由遊びの中で自然物を取り入れていった。

具体的には、保育室の制作コーナーの近くに、木の実(ドングリ、松ぼっくり、ハナミズキの実など)と木片などの素材と、木工用ボンドを用意した。園児は木片に木の実を自由に貼って飾りを作ったり、ままごと遊び用の食べ物を作ったりして楽しんだ。多くの園児は何かを作ろうとするのではなく、形を組み合わせることで楽しむ楽しんでいた。(野田)

森で歩いている最中にも、子どもたちはさまざまな葉っぱや枝、長く絡みあう根っこ、正体不明の半透明な粒など、さまざまな物を掴み、眺め、採取していた。自然物は、それが何に利用され得るのかということよりも、かたちそのものを感じ、確かめ、豊かにイメージを広げることを可能にする。当初計画のねらいのなかで指摘された、自然物を対象とした場合には「上手/下手」が問題の域外に置かれるということとともに、自然物のなかに「何らかの価値を発見することや想像力を膨らませる」ことが、子どもたちの活動のなかで行われるようになっていたことがわかる。このことに関連して、荻原はある子どもの変化について次のように論じている。

子ども達は、以前から園にある松の木からマツボックリを採る事に関心があり、秋になり登降園時にもあちこちから木の実を探してきていた。教育林に行った当日森の中に木の実が少なかった事もあってか、葉っぱや木の枝にも関心を寄せるようになっていった。保育参加後、木の実をままごとなどで使い始める様子が見られたため、保育室の制作コーナーにも木の実などの自然物を意図的に準備しておいた。いつもは、自分から何かを作ったり描いたりする事が少ない子どもが、じっくりと取り組んでいた姿が印象的だった。

普段、制作にじっくりと取り組む事が少なく、絵を描いたりする事も少ないA児が木の実などを使って制作をおこなった。

A児は降園後毎日のように習いごとに行っている様子。「評価」される事の中で自分なりの表現をする機会が奪われてはいないか？先日、新野先生もおっしゃっていた自然物による表現の自由性がA児の意欲に繋がっていったのではないか。（荻原）

A児の様子が、自然物と向き合うことと因果関係を持つ、継続的な変化や成長として捉えられるかどうかは、早急には評価できない。A児のその後の園生活から総合的に判断するしかない。しかし、この一連の活動のなかで、A児が心を落ち着けて取り組めるもの、「思考や理性」を動かし、好きだという感情を傾けることができ、「何らかの価値を発見」できるものと出会えたことは確かである。保育は、どの子どももそれぞれ、何かの折にそうした経験をすることで、幸せな時間を生きることそのものを学ぶ機会であり、荻原のコメントは、そうした経験をできているかどうかという意味で、記述的保育評価そのものである。

ところで、教育林に木の実が少ないことは、実際に活動を行うまで参加者は知らなかった。林で木の実や葉っぱなどを見つけて造形活動を行うというアイデアもあったのだが、そうしたプログラムを固定しなかったのは、子どもの発見や出会い、驚きなどを大切にしたい時間にしようとする全員が考えたからだ。科学的な文脈からいえば、その後の造形活動と教育林での体験は、大人の「森」のイメージのうえで繋がっているのであり、現実のレベルで繋がっているわけではない側面もある。造形活動に関心を持って取り組む子どもがいる場合、保育の文脈ではその矛盾を問わないが、芹澤は木の実の少なさに関心を抱いて調べ、後日コメントを執筆者の間で共有することになった。以下はそのコメントである。

コガネムシ上科の幼虫とミズナラの果実（ドングリ）が少なかった件

「はかせ」はコガネムシ上科の幼虫，できればクワガタムシ科の幼虫を見つけようと，園児やその親たちと共に朽ち木を懸命に掘ったが，幼虫は見つからず，越冬中のスズメバチ科の女王蜂を見つけてしまい，安全上の理由から即座に叩いて埋めた。しかし，恐らく同じ女王蜂をまた掘り返してしまった親子がいたようであった。また，「はかせ」はミズナラの樹木がたくさんある割には，

その果実（ドングリ）が少ないと感じていた。公園などではシラカシやマテバシイが植栽されていればその下にはかなりの量のドングリが存在することは経験的に多くの子供達が知っているはずだ。幼稚園の園庭などでも雑草を少し引き抜くだけでコガネムシ類の幼虫はすぐ見つかる。「はかせ」は森ではドングリや幼虫を捕食するネズミ類などの小動物がいるため、ドングリはそれほど多くはなく、幼虫も見つからないということに気づき、質問が出ないかと待っていた。しかし、幼虫掘りに夢中になっているためか、園児もその親達も、幼稚園の園庭にはたくさんいるのに、大自然の森の中でなぜ見つからないのかといった疑問は湧いて来ないようであった。文献調査の結果、アカネズミなどの齧歯類（ネズミ目）はドングリを、アズマモグラなどのトガリネズミ目はコガネムシ上科の幼虫を実際に捕食していることがわかった⁶。

自然科学的な真摯な態度が、保育のなかで何を意味するのかということが問われる機会は、あまり多くはない。しかし、自然の状況に合わせて活動し、予測や期待と異なることに率直に自然科学的な視線で向き合うことは、新たな学びを導入する可能性を開く。保育や教育は、その専門家が携わるものであり、子どもの育ちを促すという価値や、心理学的見識に基づく対応などが重視される。しかし、子どもとともに生活を構築し、学ぶことが教師や保育者の役割だとしたら、自然科学的な態度を持つ人の存在も、あるいは他の価値観を持って生きる人々も、子どもたちにとって、また保育や子育てに携わる大人たちにとっても重要な存在なのではないだろうか。

6. 子どもたちの声と育ちの評価

子どもたちが持っている力を、私たちはどのように評価できるだろうか。野田は、自然のなかに出ていった時の子どもたちが、大人びた姿を見せるところを記録している。それは、親子の間では守られるべき子どもという立場に立っているようにみえて、実は子どもの力が自然に発揮されてしまう場面でもあった。以下は子どもと保護者のやりとりの記録の抜粋である。

山道にて「ママ、危ないから手つないであげる」と母の手をとる。

橋を足で揺らした後、「安全確認したんだよ」と。
その前に母が橋から落ちていたため。

朽ちた木を掘り、幼虫を探している時
母「これでホントに虫とか出てきたら、ママ、嫌なんだけど」
子「大丈夫、僕がつかまえてあげるから」

普段なら、母親が子どもを守る、という関係であることが多いが、森の中では、子どもが親を守ろうとしている。「任せて」という子どもの姿が頼もしく感じられる。

また、興味の対象が、自然環境のなかで思わぬ広がりを見せていることも、野田と荻原が普段の子どもたちの姿のなかから指摘したことである。

普段、室内遊びが多い女兒が、森の中では虫をつかまえていた。園生活では生き物に関心がなさそうだったが、森の中での体験を通して、新しいものに出会い、興味の幅が広がった。(野田)

* 県の林務部担当者による事前のお話を聞いた時から、子どもたちは「どんな幼虫が捕まえられ

るかな?」「どんな動物がいるんだろう?」「松ぼっくりやドングリを取ってこよう」といった「具体的な成果物」を自分なりに思い描くことができているように感じられた。

当日、幼虫も動物も木の実など予想していたようなものが見つけれなかった。子どもたちはどんな表情をするのだろうか?残念そうに下を向きながら、うなだれて山を下りてきてしまうのか。見事にその予想は外れた。どの子も「自分が見つけたもの」を大事そうに抱えてにこにこしながら集まってきた。最後の「宝物紹介」の時間には、どの子も誇らしそうに自慢げにみんなに「宝物」を見せていた。

子どもは、何があるかわからない自然の森の中で、自分の力で探したこと、そのプロセスに満足しているのだということが感じられる。保育者は、「何が見つかったか」ではなく「どんなふうに見つけたか」ということを個々の子供の姿から丁寧に捉えなくてはならないのだろう。一部の何の目的も見いだせていないように見えた子も豊かな自然に触れ、いつの間にか自分なりに何かを「探すこと」、そのものを楽しんでいた。「楽しかった」「明日もきたい」という言葉にこの活動のなかでの充実感が感じられる。(荻原)

7. 保護者と子どもの育ちの保障

この活動のねらいのひとつに、保護者の不安感や、動植物や汚れることなどへの忌避感、できる、できないといったことへの強い関心などにはたらきかけるという点があった。その観点から、保育参加に大学教員が加わることの意義について、私たちは当初、保護者にとって安心や満足感が得られる状況を用意することになるのではないかと考えていた。実際に、保護者にとってこの保育参加はどのような意味があったのだろうか。野田は、その事情について、次のようにまとめている。

保護者の方に森での活動を行うことを伝えたとき、B児の母親は「舗装された道じゃなくて、森の中を歩くのですか」と驚いていて、数日前には下見に行くほど、不安があるようだった。しかし、当日、B児が頂上を目指してどんどん進んでいく姿を見て、母親は「Bくん、待って～」と言いながらも、少しうれしそうで、息切れしながらも我が子を追いかけていた。

数日後、母親から次のような感想をいただいた。「舗装された道以外の湯村山を歩いたのは初めてでした。「松ぼっくりを見つける」という宝探しの使命はどこへやら、「登山」を体いっぱい楽しみました。みんなで一緒に「ヤッホー」は爽快だったと思います。彼にとってはこれが一番貴重な経験でした。(後略)母親自身が、森での活動経験が少ないのか、森へ行く事への不安が大きかったが、我が子が楽しそうに森を歩く様子を見て、母親も一緒に楽しんでいたようにみえた。

最初のねらいとしては、森に入ることにより、「保護者が子どもの楽しさを知る」ということだったが、いつの間にか、保護者自身も子どもと同じように楽しんでいる場面が見られたことは、保護者の育ちととらえられるだろう。その背景には、専門家が一緒にいることも大きな安心となっていたと考えられる。

自然体験の少なさは、今や子どもたちだけの問題ではない。保護者の世代はすでに、自然体験が少ない。しかし、実際に経験してみると、無条件に楽しさを味わうことができるという意味で、自然環境に触れることには意味がある。しかしそれだけでなく、子どもたちが有能であること、当初目的から外れた活動をすることが「間違い」ではないことなどを、身をもって感じるということも、保護者世代の重要な経験になっているのではないか。

森に入るときには、何をするのかよくわからないといった表情の保護者や、「幼虫を見つける」など

の目的にこだわっていた保護者も多かったが、斜面を降りてきて子どもたちの発見した「宝物」の発表を見る頃には、「あれなあに?」「どこにあったの?」「すごい」と感嘆の声をあげていた。それは、上手/下手とか、できる/できないという観点を越えざるを得ない体験のなかで、自身の子どもだけでなく他の子どもに対しても、その体験を共有し喜びあえる時間だった。出会いや発見を通して、自分にとっての価値を創造することは、今、子どもたちだけでなく、保護者世代にとっても必要になってきている。

まとめ

当初造形活動の計画から始まった活動は、自然環境における保育を共通の基盤にして、保育者とそれぞれの分野の研究者が、互いの多様性を発見しながら協同的に子どもの育ちに関わるものとなった。

子どもたちが「はかせ」や林務課の職員をきっかけにしながら、これまでの生活から一步外へと踏み出すこと、そのときに専門家は、子どもたちの関心を受けとめながら、子どもたちに触発されて外へ踏み出す存在であることが確認された。また、今日の子育てや保育、教育全体のなかで、大人も子どもも結果や能力に捉われがちになるが、子どもたちが喜びをもって「感じ」「考え」「表現する」ことが、子どもの育ちへとつながることも、あらためて確認された。その点を保育者だけでなく、保護者や周囲の人々に共有されることこそが、結果を重視するのではなく、過程を重視する保育を指示する保育文化を形成する糸口となる。一方で、保育とは異なる分野のさまざまな人々が保育に関わることで、身の周りの環境に興味を持ち、目を開き、価値を創造する学びを保育現場にもたらず可能性が増大する。こうしたふたつの観点から、保育は大学だけでなくさまざまな人々が関わり、価値を創造する場となることが肝要といえる。

- 1 茶谷智之「自然環境と幼児理解の視座—自然保育ポータルサイトの実践例の分析から—『帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要』第4巻 2017年。
- 2 鬼丸吉弘『児童画のロゴス』勁草書房、1981年参照。
- 3 川邊貴子『遊びを中心とした保育—保育記録から読み解く「援助」と「展開」』萌文書林 2005年 p. 53.
- 4 ワタリウム美術館『子どもたちの100の言葉』日東書院 2012年 pp. 33-34.
- 5 直木秀夫, 戴荔, 中嶋暉躬. (2003) 昆虫毒と質量分析. *Journal of the Mass Spectrometry Society of Japan* 51: 91-95.
- 6 林典子, 井上真理子, 大石康彦. (2011) アカネズミの食性調査手法の簡易化と環境教育における利用の試み. 森林総合研究所研究報告, 10(3): 163-172.
Takahashi, M., Arai, T., Ohdachi, S. (1982) Stomach contents of *Mogera wogura wogura* (Temminck) collected in the Hanno City, Saitama Prefecture, Japan. Part I (埼玉県飯能市で採集されたアズマモグラの胃内容物, 第1報). *Bulletin of Kawagoe Senior High School*, 19, 24-29.

